
ache

彩美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a c h e

【Nコード】

N 4 7 3 4 N

【作者名】

彩美

【あらすじ】

ある日、自分の好きな人を、妹が「あたしの彼氏」だと言って家に連れて来た。

「お姉ちゃんに紹介するね」

つい、この前。

私が普段より少し遅く学校から帰宅すると、妹が玄関にいた。

妹の隣には、私にとって見慣れた人が立っていた。

・・・見慣れた人であり、愛しい人でもある。

「沢木 康弘 君。あたしの彼氏なんだ」

何があだか分からなくなった。

・・・沢木君が陽菜の彼氏？

「・・・あれ？ 小早川？」

沢木君が言った「小早川」は私の事だ。

私の名は こはやがわ 小早川 あゆか 歩花。

妹の名が こはやがわ 小早川 ひな 陽菜。

「よく見たら小早川じゃん。そっか。
ウチのクラスの小早川だったんだな」

陽菜のお姉ちゃんって、

「え！？ 康弘とお姉ちゃんって、同級生だったんだ？ 同じ学校だって事は知ってたけどさ」

私を無視して、話は勝手に進んでいく。

その通り。

私と 沢木 康弘君は、
同じ高校の同じ学年。
同じクラス。

「思えばいたなー。ウチのクラスに小早川って奴。忘れてた」

「・・・」

忘れてた、って・・・。

高校に入ってから3年間、ずっと同じクラスなのに。

「あたし達、同じ塾で知り合ったんだ。最初は康弘の方から話しかけてきてくれて。それでね　・・・」

そんな話、どうでも良い。

「　・・・と、いうわけで。あたし達、付き合ってるんだ。　だからお姉ちゃんも、康弘と仲良くしてね！」

・・・仲良く？　出来るわけがない。

「あたし達の事、応援してよね！」

応援なんかしない。　したくない。

・・・そりゃあ、陽菜は頭が良い。
全くメイクもしていないけれど、馬鹿みたいにメイクを濃く塗りたくっている奴らよりも、遥かに可愛い。

今、私は高校3年で、
陽菜は高校2年だ。

高校は別々。

陽菜は今、進学校に通っている。
友達もたくさんいて、毎日が楽しいそうだ。

それに比べて、私は。

頭は悪いし、特に可愛いわけでもない。
友達もいない。

小学生の時からそうだった。

陽菜はすごく明るくて、活発で。
いつもリーダー的存在だった。

私は暗くて、言いたい事も言えない性格で。

そのおかげで 嫌な係を押し付けられたりもした。

私は同級生から悪口ばかり言われ、辛い小学校時代だった。

そしていつからか私は、陽菜を羨むようになった。

「・・・お姉ちゃん？ あのだ」

私は我に返る。

時々、あるのだ。

昔の事を思い出して、考え込んでしまうことが。

「康弘、もう帰るからさ。 あたし、ちよつとそこまで送ってくる。
夕飯、テーブルにあるから、温めて食べてね、って。 ママが」

「あ、うん……。分かった」

私はそこでようやく、言葉を発した。

「じゃ、いつてきまーす」

妹は私に向かって元気良くそう言い、沢木君の手を取り、外へと出て行った。

ガチャン・・・

去り際、沢木君は一度もこちらを見なかった。

「
．．．．．
」

この日からだった。

私の日常が、再び曇り始めたのは
．．．。

「おはよう、お姉ちゃん！」

平日。

いつも通り私が制服に着替え1階へ降りていくと、陽菜はもう家を出て行くところだった。

「・・・おはよう。もう出るの？ 早すぎるんじゃない？」

私は居間の時計を見る。
まだ午前7時20分。

「今日はねー、途中まで康弘と一緒に行くんだ！学校」

「・・・」

確かに陽菜の通う学校と、私達の通う学校は遠くはないけれど。

「陽菜、今までこんな早く出て行ってたっけ？」

今まではもっと遅かったはず。

陽菜の通う学校と私達の通う学校は、どちらも8時40分に校門が閉ざされる。

私と陽菜。私達の家からは、どちらの学校も20分程で着く。

陽菜は7時50分、私は8時10分にそれぞれ家を出ていた。

「今日からね、あたしの家の近くで康弘と待ち合わせしてるの！
ほら、康弘の家って、ここから微妙に遠いでしょ？」

陽菜は満面の笑みでそう言う。

「だからウチまでは来ないで、近くで待ち合わせにしたの。あ
っ！」

「・・・何？」

「もう2分も過ぎちゃったじゃん！ 近くって言うっても、ここから歩いて3分はかかるんだ。だから急がなきゃ！ 行つてきまーす！」

慌てて家を出て行く陽菜に、私は暗い顔で手を振った。

「・・・」私はその顔のまま、食卓テーブルに着く。

椅子に座っても、手を動かせない。

「・・・いつもなら無表情で朝食を食べ、無表情で家を出て行くだけだ。」

「お父さんとお母さんは、もう仕事か・・・」

家には私以外、誰もいなかった。

その静寂が却って私をイラつかせた。

・・・イライラする。

そして食事が終わり、私は自分の鞆をまるで八つ当たりするかのように強く引っ張った。

「・・・っ」

私は天井を睨み付け、走りながら玄関へ向かい、家を出た。

そこからは普通に歩く。
だって、人が見ているから。

学校に着いても、気分は晴れないまま。

授業中も上の空。

・・・私の方が、好きなのに。

2年前、この高校に入学して、同じクラスになった時から。

一目惚れだった。

別に話しかけられたりしたわけでもないのに。

一目見て、好きになってしまった。

最初は性格がどうなのかも全然知らなくて、でも……。

休み時間とか授業中、見てた。
ずっと。

「・・・」

もちろん私のことから、こそこそ見ていたけれど・・・。
目が合いそうになると、慌てて視線を元の位置に戻したり。

「・・・」じつと見ていても、沢木君は・・・。

一度もこちらを見ない。私を、見てくれない。

それでも、私は、知ってる。

沢木君は頭が良くて、運動も出来るってこと。

沢木君は普段は友達をからかったりするけれど、本当は友達思いだ
ってこと。

最近、ケータイを青から白に変えたこと。

私と同じように、妹がいるってこと。確か、3歳下だったかな？

本を読むのが大嫌いなこと。

ゲーム機を何台も壊したことがあること。

部活帰りに、部活仲間と寄り道するのが好きなこと。

一ヶ月前に、飼っていたハムスターが死んでしまったこと。

・・・なぐさめて、あげたいな。

それから、それから・・・

「“友達”なら大したことない」って言われるかもしれない。
けど私は・・・。

「友達にすら、なれてない」

学校帰り、1人 ポツリと呟く。

・・・友達どころか、忘れられてた。

それでも・・・

「自分から、『小早川』って、呼んでくれた。
私の事、私の存在・・・
知っててくれてた」

私が家に着きドアを開けると、丁度2階から陽菜が制服姿のまま降りてきた。

陽菜は小さいクマのぬいぐるみを抱えている。

「ただいま」

「お帰りなさい 見て見て、これ」

私は再びクマのぬいぐるみに視線を移す。

「・・・それがどうかした？」

私は冷たく聞き返す。

でも陽菜はそんな私に全く動じず、嬉しそうに話し出す。

「これね、ゲーセンで康弘に取ってもらったの」

目が見開いていくのが分かった。

危うく鞆を落としそうになる。

「・・・帰りも 一緒に帰ってるんだ？」

私は震える唇で陽菜にそう問う。

「うん。そーだよ。朝の時と同じ場所で待ち合わせしてるの」

言いながら陽菜は、可愛らしいクマのぬいぐるみを私に近付けてくる。

「・・・何よ」

「お姉ちゃんにあげようと思って」

・・・は？

「康弘ね、すごいキャッチャー上手くて。
あたし、もう5個も取ってもらっちゃって

でね、あたしの部屋、もう飾れないの。
だから、お姉ちゃんに」

「要らない」

即答だった。沢木君が陽菜のために取ったぬいぐるみなんて、要らない。

「えー、受け取ってよ」

陽菜は更にぬいぐるみを私に近付ける。

私はそれを、手で振り払った。

パシッ・・・

「要らない」

私の目頭は、少しだけ熱くなっていた。

「ひどーい」

陽菜は床に落ちたぬいぐるみを見て、言った。

「このぬいぐるみ一番小さいし、飾りやすいと思うけどなあ。
あたしがもらった中で一番大きいの、こーんなだよ？」

そう言って、陽菜は縦に大きく手を広げた。

・・・確かに大きい。 60?くらい？

「・・・というわけで、この子も行き場なしじゃ可哀想だから、も
らってよ」

そう言っただけで陽菜は床からぬいぐるみを拾い上げた。
そして私の両手を持ち上げ、その上に乗せた。

「じゃあ、大事にしてよね！」

陽菜は笑顔でそう言い残し、再び2階へと駆け上がって行った。

私は少しだけ陽菜の上がつていった階段を見続けたあと、すぐに下に視線を下ろす。

「・・・」

くるんとした目で、じっと前を見据えている、クマのぬいぐるみ。

沢木君が取った、クマのぬいぐるみ。

私は震える手でそっと、ぬいぐるみの頭に触れてみる。

・・・やわらかい。
心地いい手触り。

私は　ぬいぐるみを自分の目の前に掲げる。

「・・・私は」

こんなぬいぐるみより、沢木君が良い。

掲げたぬいぐるみを、再び床に落とす。

「どうして・・・」

熱くなっていた目頭から、涙が零れる。

「私の方が沢木君の事、知ってるのに・・・」

今日もいつも通りの、下らない日。

「ただいま」

この時間はいつも私1人だ。

お父さんとお母さんは仕事。

陽菜は部活も何もやっていないので、普通ならもう帰って来るのだけれど。

「また遊びに行ったのかな・・・」

陽菜は時々、学校が終わっても家には帰らず、友達と遊び回っている。

「・・・」

私は、こういうのは、小学生の時から身に付くものだと思う。

陽菜は小学生の時、平日も休日も構わず友達と遊んでいた。

家で宿題なんかやってる姿は、見たことがない。

私は手洗いと　うがいを済ませ、冷蔵庫を開ける。

・・・何もない。

「・・・」私は冷蔵庫を閉め、2階の自分の部屋を目指して、足早に駆け出した。

ボタン・・・

私は自分の部屋に入り、扉を閉めた。

そして右肩に掛けていた重い鞆を床に放り投げた。

そして側にあるベッドへ身を投げる。

「・・・疲れた」

深いため息をつきながら、天井を見る。

・・・陽菜は今、何してるんだろう？

私は自分の手で自分の視界を遮った。

沢木君と一緒にいるのかな。

・・・そうだね、きっと。2人は恋人同士なんだから。

いくら私が沢木君を好きでも、沢木君はこちらを見ようともしてくれない。

沢木君だけじゃない。

今まで誰も、私を見てくれなかった。

「・・・」

自分から動けば良かったのかもしれない。

でも、私にはそんな力、なかった。

そのせいで小さい頃からずっと、友達もいなくて

そうだね。せめて

「友達さえいれば私の人生、もっと充実してたのになあ」

いつまでこんな人生続くんだろう

[illegible]

「……か。歩花」

私はあのまま眠ってしまったようで、ベッドの上で、制服のまま目を覚ました。

「おかーさん……」

私が目をこすりながら目の前を見ると、お母さんが立っていた。

「・・・おはよう。もう朝？」

私は寝ぼけて、ついそんな言葉を発した。

「何が朝よ。今は午後6時半。夕飯の時間だよ」

お母さんに、そう冷たく返される。

「夕飯ね・・・。夕飯なに？」

「良いから下に降りてきて。早く食べちゃってよ」

「・・・はい」

私がそう返事をする、お母さんは急ぎ足で階段を降りていった。

「・・・」

気怠い体でベッドから起き上がると、私はため息を吐きながら、私服に着替え、1階に降りた。

1階へ降りても、仕事をしているお母さん以外誰もいない。

食卓には、1人分の夕飯が置いてある。

「お母さんはもう食べたの？」

私はパソコンに向かっているお母さんに声をかける。

「食べたよ。とつくに」

お母さんは面倒くさそうにそう答えた。

「そつか。・・・あ」

私はお母さんに近付く。

「ねえ、何してんの？」

お母さんが仕事をしているのは分かっていたが、何となくそう聞いてみた。

「見れば分かるでしょ。仕事中」

吐き捨てるように言い、キーボードを打つ手を早めた。

・・・確かに。

何かよく分からない数字がたくさんある。

「あっち行ってくれない？ 邪魔」

こちらも見ずに、そう冷たく返す。

そして私は、食卓テーブルのいつもの私の席に座った。

「・・・」

黙々と食べ続ける。

お母さんはいつも
私に対してこんな態度だ。

別に今日に限ったことじゃない。

私が夕飯を食べ終え、席を立とうとした時。

シーンとしていた居間に、大きな声が響いた。

「ただいまー！」

陽菜が、帰ってきた。

すると今まで仕事をしていたお母さんが、パソコンから顔を上げて言った。

「おかえり、陽菜」

私は無言で陽菜を見る。

陽菜は笑顔でお母さんに近付いて行った。

「ママ。 仕事？」

陽菜はパソコンにも顔を近付けた。

「仕事。 最近忙しいのよ」

心なしか、お母さんは笑顔だ。

「大変だね。 あたしにはよく分かんないやー」

「そりゃね。 そう言えば陽菜、 今日遅かったね？」

「ああ、 うん。 康弘とね、 買い物してたの」

・・・やっぱり沢木君と一緒にだったんだ。

私は2人の会話に交ざろうとせず、食器を下げて、自分の部屋へと戻っていった。

居間にいたってする事がないし、沢木君の話なんて聞きたくなかったからだ。

私は自分の部屋の扉を閉め、ゆっくりとした動作でベッドに座った。

ふと、机の上に置いてあるクマのぬいぐるみが目に入る。

・・・この間、陽菜からもらったぬいぐるみ。

「・・・」

元々は、沢木君が陽菜にあげたものだった。

私は、机の上に座るクマのぬいぐるみをじっと見つめる。

捨てるという選択肢もあったが、それはやめた。

「未練がましい」

沢木君との繋がりが、少しでも欲しかった。

・・・そんな欲望に負けてしまった。

これ以上ないくらいに、沢木君が好きなのに。

3年間、同じクラスだったのに。

見ているばかりで、動こうとしなかった私。

その結果、沢木君は妹を好きになり、妹も沢木君を好きになってしまった。

私が入る余地は、なくなってしまった。

残るのは、後悔と憎しみだけだ。

コン、コン・・・。

控えめな音が部屋に響く。

「お姉ちゃん」

・・・どうやらノックしたのは陽菜のようだ。

「開けてー」

今は話す気になれない。
だから開けない。

「・・・もしかして、もう寝ちゃったの？」

私は物音をたてないよう、ドアの方をちらっと見る。

「・・・」

それきり、もう声はしなくなった。

ドアに近付き、聞き耳を立ててみるが、全く音はしない。

私は再びベッドに戻り、横になった。

・・・眠い。

視界がぼやける。

私はそのまま、安らぎを求めて夢の世界へと旅立っていった。

次の日の、朝。

制服に着替え、部屋を出ると、部屋の前に黄色い小包が置いてあった。

・・・思い当たる人物がいたので、その小包を持って1階へと急ぐ。

その人物は食卓テーブルの自分の席に着き、ケータイを手に持って

いた。

「陽菜」

「あ、お姉ちゃん。おはよ」

陽菜は持っていたケータイを閉じ、私に顔を向けた。

「・・・ねー、元気？」

陽菜はそんな言葉を私に投げかけた。

「・・・まあ、いつも通り」

私は無表情でそう答える。

・・・何でそんな事聞くの？

「そっか。良かった」

「？」

「お姉ちゃん、昨日夕飯食べたらずぐ部屋に戻っちゃったじゃん？
だから心配で」

陽菜は安心したような声を出す。

「別に、いつも通りでしょ・・・」

私が呆れたようにそう返すと、陽菜は怒ったように言う。

「えー！いつもより元気なかったよ！」

「・・・はいはい」

陽菜は周りを見ていなさそうに見えるのに、意外と周りを見ている。

「そうそう。黄色い箱、見た？」

私は陽菜の声に、右手を差し出した。

「それそれ！ 受け取ってくれたんだ」

「・・・部屋の前に置いてあったから」

別に受け取ったわけじゃない。

「中身、リボンだから。開けてみて」

私は陽菜の言う通り、黄色い小包を開けてみた。

・・・何でリボン？

中身は、陽菜の言った通り リボンだった。

「それね、あたしがあげたクマちゃんにつけてあげて」

「・・・え？」

「あたしの方のクマちゃんもそうだけどさ、何か寂しそうだったから」

そう言つて陽菜は首を傾げる。

「だから、昨日買い物行つて買ってきたの」

陽菜は私の持っているリボンを指差した。

このリボンが入っていた包みと同じ色。

黄色いリボンだった。

「可愛いでしょ。それ」

そのリボンは、全体が上品なフリルだった。

確かに可愛いし、あのクマのぬいぐるみに合うかもしれない。

「何となくね、お姉ちゃんっぽいかなって」

照れたように笑う陽菜に、私は言う。

「ありがと・・・」

嬉しくもなかったが、一応。

陽菜はにっこりと笑う。

「そういえば」

私は話題を変えようとした。

「もう7時半だよ。陽菜、出なくて良いの？」

「あー・・・」

陽菜はいきなり顔を曇らせる。

「今日ね、康弘、部活早く行かなきゃならなくなっただって」

沢木君はサッカー部に所属している。

そして現在、サッカー部は次の試合に向けて頑張っている。

だから、毎日朝練がある。

「朝練ね。でも、朝練なんてもっと前からあったけど」

すると、陽菜は顔を上げた。

「それは知ってるよ。今日は特別、早いんだって。・・・って、お姉ちゃん」

陽菜は驚いたように私を見る。

「サッカー部が朝練あること、知ってたんだ？」

・・・私、そんなに満足そうな顔、してた？

「まあね。クラスの人が話してるの、聞いたから」

これは本当だ。

沢木君たちのグループが話しているのを聞いた。

「へえー。そうなんだ」

陽菜は気の抜けたような声を出した。

・・・本当に残念そうだ。

そんな陽菜を見て、自然と自分の顔が緩んでいくのが分かった。

「ねえ、陽菜」

私は俯く陽菜に声をかける。

「今日、途中まで一緒に学校行かない？」

陽菜はスッと顔を上げた。

「う、うん。 良いけど・・・」

陽菜は言葉を詰まらせつつも、続ける。

「どしたの？ 急に」

私は無表情で答える。

「別に。 何となく」

陽菜の暗い顔を もう少し見たかったから。

「うん！一緒にいこう！」

陽菜は無理に笑顔を浮かべる。

・・・そんな陽菜の笑顔を見て、私の心の中は踊った。

そして、私達は家を出た。

時々、陽菜と言葉を交わしながら歩く。

でも喋っている陽菜の表情はいつもと違う。

口角は上がっていても、目は笑っていない。

「無理に喋らなくて良いよ」

私はそんな陽菜を鬱陶しく思い、本音の言葉を発した。

すると陽菜は一瞬だけ目を見開き、そして下を向いた。

「・・・無理なんて、してないよ」

隠さなくたって良いのに。

・・・それにしても。

何でそんなに落ち込めるの？

たかが、一緒に登校出来なかっただけなのに。

「呑気すぎるよ」

私は、小さくそう言ってしまった。

「え？ 何？」

陽菜に聞こえてしまったらしく、聞き返される。

「何でもない」

私は一言だけ返し、歩みを早めた。

・・・そして、私達は途中で別れ、それぞれの学校に着いた。

それから私はつまらない日常を過ごし、すぐに放課後になった。

掃除を終え、帰るために下駄箱へと向かっていた。

その時
・
・
・

くくく．．．．．

私の鞆の中から、小さく音が聞こえた。

その場で立ち止まり、鞆の中を探る。

．．．あつた。

その音を聞いたのは、かなり久しぶりだった。

相手は陽菜。

この音は、確かメール。

「何だろ・・・」

私は最近あまり触れていなかったケータイを開き、受信ボックスの

一番上を押した。

“ 題名：今日の放課後 ”

私はそのメールの題名を見て、眉をしかめた。

そして、本文へと目を移す。

“ お姉ちゃんの学校の門の所で待ってます。早く来てね ”

そんな短い文章だった。

けれど私は、嫌な予感を覚えた。

「
・
・
・
つ
」

私は、
ケータイを閉じた。

そして再び、下駄箱に向かって歩き出したのだった。

私は、学校の外へと出た。

「・・・」

少しだけ、顔を上げた。

門の辺りには、2つの影が見える。

私が歩みを進めると、2つのうちの1つの影が近付いてきた。

「お姉ちゃんっ」

今朝、聞いたばかりの声。

「・・・陽菜」

最後に会った時と違い、陽菜は笑顔だった。

「あのね、康弘が『今朝は一緒に行けなくてごめん』って謝ってくれたの」

・・・それは良かったね。

「それでね、そのお礼に、康弘のおごりで何か食べに行っちゃって」

「へえ」

わざわざそれ知らせに来たの？　　ウザイ女。

「『へえ』じゃないよ。お姉ちゃんも行くんだよ？」

「・・・は？」

確かに門の近くに沢木君はいる。
でも何で私まで？

「・・・お姉ちゃんさあ、朝、途中まで一緒に行ってくれたじゃない」
「い」

・・・そうだった。
忘れてた。

「だから、あたしと康弘からのお礼だよ！」

要らないよ。
そんなもの。

「ほら、康弘も待ってるよ！ 早く行こー」

そう言っつて陽菜は私の手を引っ張って進む。

「ちょ、ちょっと！人が見てるのに・・・」

私達の周りには、下校している生徒が何人かいた。

・・・その何人かが、私達を見ている。

「離してよー・・・」陽菜は周りの人など構わずに、私を引っ張り続けた。

「お姉ちゃん連れて来たよー」

陽菜が沢木君に声をかける。

「じゃ、行くか」

沢木君は、手を伸ばした。

・・・陽菜に向かって。

「わーい」

途端、私に繋がれていた手は離された。

「・・・」

代わりに、沢木君と陽菜の手と手が繋がれた。

「
}
}
!
}
}
}
」

遠く、沢木君と陽菜の会話が聞こえる。

「
.
.
.
.
.
.
」

私は、「仲間外れ」だ。

気がつけば、辺りは騒がしい。

「ねえ、陽菜」

私は、さっきからずっと喋りっぱなしの陽菜に声をかけた。

・・・が、返事はない。

聞こえなかったのだろう。

「・・・・・・・・」

それだけの事なのに、妙に苛立った。

大量に行き交う人々。

騒音と思えるほどの声。
所狭しと並ぶ建物。

ここは・・・繁華街？

「陽菜？」

今度は陽菜が気付くように、肩を揺すった。

「何？お姉ちゃん」

陽菜は笑顔で私を振り向く。

沢木君と陽菜は前を歩いていて、私は後ろ。

だから、陽菜が後ろを振り向くことになった。

「何でこんな所まで来る必要があるの？ 食事するだけなのに」

食事するだけなのに、何でわざわざこんな所歩かなきゃならないのよ？

「康弘のお気に入りのお店があるんだってさ」

陽菜は沢木君をちらっと見ながら答えた。

・・・お気に入りねえ・・・。

「ここだよ」

沢木君が横にいる陽菜に言った。

「・・・」

目の前にあるのは、何てことのない、普通のレストラン。

「あれ・・・？」

2人が、いない。

私はきよろきよると周りを見回す。

やっぱり、いない。

「・・・・・・・・ん？」

何気なく目を凝らしてガラス越しに店の中を見ると、いた。

私は、駆け出した。

店の中へと入る。

「いらっしやいませ。 お席の方は . . .」

「知り合いがいるので、大丈夫です!」

私は、沢木君と陽菜のいる席を目指した。

．．．さすがに店の中なので、全速力で走った訳じゃないけれど。

私は、早歩きより少し早いようなスピードで向かっていった。

着いた。

私は、沢木君と陽菜のいる席の目の前に立った。

2人とも、気付かない。

・・・お喋りに夢中だから。

「・・・」

どういっつもり？

私を置いていくなんて。

何が「お礼」よ。

ほんの少しの間そこに立つたまま怒りを巡らせていると、陽菜の聲が私に向いた。

「あ！店員さん、あの・・・って。え？」

陽菜の目が大きく見開かれる。

多分、驚いているんだろう。

「・・・お姉ちゃん!？」

その声に沢木君も反応する。

「小早川？」

2人して、そんな言葉を発する。

「・・・」

私は無言のまま、そんな2人を見下ろす。

「ごめん！お姉ちゃん」

陽菜が両手を合わせて私に謝ってきた。

「話に夢中で、気付かなかったの！本当にごめん！！」

気付かないわけがないよ。
どんなに話に夢中でも。

「・・・」

沢木君は無言。

無言で、メニューを見ている。

「康弘も気付いてなかったんだよね？」

陽菜がそんな沢木君を見る。

「いや、帰ったのかと思って」

その言葉に、陽菜の目は再び見開かれた。

「は？ お姉ちゃんが勝手に帰るわけないじゃん！」

「学校の門の所でも嫌そうにしてたし。
帰っても不思議じゃないだろ？」

陽菜が沢木君を睨んだように見えた。

「お姉ちゃんは、そんな非常識な事しないもんっ!!」

「言い切れないだろ。」

俺は別に、小早川が帰ったんならそれで良いと思ってたし」

そこで沢木君は、ちらつと私を見た。

「それに、その方が陽菜と2人きりになれるだろ?」

・・・え?

「今回は『お礼』の意味でお姉ちゃんを連れてきたんだよ!？」

陽菜は完全に怒っているようだった。

「そのことは康弘も同意してたじゃん！」

「でも最初は反対したよ。俺には小早川に礼する義務なんてないんだから」

沢木君は軽くため息を吐いた。

「でも同意した事に変わりはないよ!」

「そうだけど。元々、俺を巻き込まないで、陽菜だけが小早川に礼すれば良かったんだよ」

「何でそうなるの!」

2人が喧嘩を始めた。

私の事で喧嘩をしているのに、私はもう傍観者になってしまっている。

「・・・」

さっきまではすごく仲が良かったのに、今は敵対している。

沢木君はあくまで冷静。

陽菜だけが怒りをあらわにしている。

そして私は、不思議なくらい落ち着いている。

何で？

私、拒まれてるんだよ？
遠回しに

沢木君に

「 邪魔
」

だって。

思われてたんだよ？

それなのに、なんで。なんで………

こんなにも平気なんだろう？

私は沢木君を見る。

「
・
・
・
・
」

本当に、「くだらない」。

そんな顔をして、陽菜と言い争っている。

私は、口を開いた。

「　　ねえ、2人とも？」

2人は言い争うのを止め、陽菜だけが私を見た。

「もう、良いよ？ 私が悪いんだよ。私が、ちゃんと沢木君たちについて行かなかったから」

「お姉ちゃん・・・」

陽菜が、悲しそうな目で私を見続ける。

自分でも、分かる。

微かに笑みを浮かべていた。

私。

「お姉ちゃん、それは、あたし達も悪いんだよ。あたしが、お姉ちゃんの手を引いていれば、こんな事にはならなかったよ」

陽菜は俯いた。

「・・・あと、もう一度言っけど。
本当に、話に夢中で気付いてなかったんだ。お姉ちゃんのこと」

「・・・」

「あたし、馬鹿だからさ。1つの事に集中すると、他のことが目に入らなくて。」

だから康弘と喋り続けてるうちに、周りが視界に入らなくなっちゃったの」

今にも泣きそうな顔の、陽菜。

「・・・ごめん!」

「陽菜・・・」

私にとってはもう、2人が私を置いて先に席に着いていた事はどうでも良かった。

それより・・・

「沢木君」

私は、知らん顔で外を見る沢木君に声をかけた。

「私がちゃんと2人について行けば、こんなことにはならなかったの。」

だから、沢木君は気にしなくて良いよ？」

沢木君は、こちらを向くこともしなければ 返事も返さない。

「陽菜も、ね？」

私は、今度は陽菜の方に顔を向ける。

「謝らなくて、良いよ?」

私は作り笑顔を見せる。

すると沢木君は、2度目のため息を吐いた。

「小早川がこう言ってるんだし、もう、良いだろ……。陽菜」

陽菜は、小さく頷く。

「うん・・・」

私も軽く、鼻でため息をついた。

「あー疲れた。食う予定だったけど、また今度にしようぜ」

沢木君が席を立つ。

「そうだね。日を改めて・・・」

陽菜も席を立つ。

そういえば私は、テーブルの前に立ちっぱなしだった。

「・・・」

このテーブルの前に来るまでもそうだけど。

お客さん、少ないな・・・。

「会計に行かなきゃな。ジュース頼んじまったし」

そう言っレジに向かう沢木君。

「陽菜、このお店って・・・」

沢木君について行こうとする陽菜に、声をかけた。

「お客さん、少ないね？いつもこうなの？」

店内はかなり広い。

いつもは賑わってそうなお店だけど・・・。

「この時間帯はね、特に空いてるみたいだよ？」

陽菜は辺りを見回して言う。

「だから、康弘が行こうって言うてくれたんだ。いつもなら、この時間帯は無理でしょ？部活があるから」

ああ、そうだった。

いつもなら、部活をやっている時間帯だ。

「・・・ほら、覚えてない？」

今日、朝練の時間が早まったじゃない」

そうだ。

今日は特別、早まったんだった。

「だから、放課後の練習が無しになったんだよ」

・・・そういうこと、だったんだ。

「普通なら、こういう事はなかなかないからさ。だったんだ」

今日はレアな日

陽菜は一瞬だけ、暗い顔に戻る。

「あつ、でも。お姉ちゃんのせいじゃないからね!」

そして、笑顔になる。

「おい! 行くぞ」

沢木君が私達を呼んでいる。

陽菜が、ダッシュで沢木君の方へと向かう。

私は一度下を向いて、ゆっくりと歩いていった。

「なあ、小早川」

珍しく、沢木君が話しかけてきた。
・・・私に。

「・・・何？」

今までだったら、頬を赤らめて、死にそうくらい動揺していただろう。

「お前さ、ここからは一人で帰ってくんない？」

「・・・」

分かってる。

陽菜と2人きりになりたいんでしょ？

私は顔を引きつらせる。

「
いいよ」

「じゃ、陽菜。行くぞ」

沢木君は笑顔で、陽菜の手を取った。

「で、でも！」

陽菜は首を横に振った。

「お姉ちゃん、一人で平気？ 普段は、こんな所来ないでしょ？」

「平気だよ。来た道、覚えてるし。じゃあね」

私はそう言い残し、その場を去った。

「・・・・・・・・」

早足で、歩く。

実を言つと、行きは考え事ばかりしていたので、道には自信がない。

だけど、帰らなくちゃ。

早く・・・・・・・・

「ない……」

靴がない。

「……」

何処にも、ない。

靴がなきゃ、家に帰れないのに……。

ドンッ！

私の肩に、何かがぶつかった。

「・・・」

明るい笑い声。

振り向くと、赤いランドセルを背負った女の子がいた。

その女の子は友達らしき女の子とのお喋りに夢中で、私には気付かない。

きっと私にぶつかったのはあの子だ。

でも、話に夢中で心から楽しそうなあの子の笑みからして、ぶつかったのは偶然だろう。

やがてその女の子達は、玄関を出て行ってしまった。

・
・
・
玄関？

私は、
辺りを見回す。

外へと飛び出していく、ランドセルを背負う子ども達。

そして飛び出していくために必要な玄関には、見覚えがあった。

・・・小学校、だ。

私の通っていた小学校。

更に辺りを見回すと、それが確信に変わる。

そうだ。

あの廊下を進んで行けば、1年生の教室がある。

そしてその角を曲がると、中庭だ。

私は懐かしくなって、つい魅入ってしまう。

でも、ここに・・・

「良い思い出なんてあったっけ？」

私の周りを通り過ぎて行く子達は、まるで私なんか見えてないみたいに振る舞う。

「ないよ。そんなもの・・・」

思い出した。

さっき、私の下駄箱には外靴が入っていなかった。

そして、今私が履いている靴は、中靴だ。

学校に入るための、靴・・・。

「あつたなあ。こんなこと」

何年生の時だか忘れたけれど。

未だにこの出来事は、忘れていない。

私が家に帰るための、靴を隠されたこと。

「・・・」

他にも、たくさん嫌がらせはされた。

今みたいに物を隠されたり、悪口を言われたり・・・。

「・・・・・・・・！」

私は爪が食い込むほど、両手を強く握った。

何から何まで思い出していたら、それこそ心の中が爆発してしまう。

考えるのを、やめなきゃ・・・。

そう思っても、次から次へと思いついてしまう。

「
・
・
・
・
・
」

頭痛がしてきた。

そういえば、結局、靴は何処にあったんだっけ。

・・・重要な事だけ、思い出せない。

「うー・・・」

痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
い・・・

何でだろう？

・・・そういえば、今の私の身長も、小学生の時くらいの身長だ。

目の前の下駄箱が、妙に高く見える。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い・・・

・・・あ！

思い出した。

私の靴は
・
・
・

[illegible]

h?

何、この音。

עֵד עֵד עֵד עֵד עֵד . . .

・・・聞き覚え、ある。

・・・・・・・・

・・・それより、私の靴は！！

バンッ！！

何かを殴るような大きな音と共に、さっきまで鳴っていた聞き覚えのある音は止んだ。

「
．．．．．ん
」

目を開けた私の周りは、微かな光。

さっきまでいた所じゃない。

起き上がってみると、私の部屋だ。

「夢か・・・」

そりゃあそうだ。

今更、小学生時代になんて、戻りたくない。

私は、立ち上がる。

すると、床に目覚まし時計が落ちていた。

多分、さっきの大きな音と、ずっと鳴っていた音の原因はこれだろう。

「・・・」

私は、目覚まし時計を拾い上げる。

私が音を止めるボタンを強く押してしまったので、その衝撃で目覚まし時計は下へと落下していった。

私は、虚ろな目で制服に着替える。

そうだ。思い出したんだ。

靴は結局、見つからなかった。

・・・誰かが持ち出したことは、明らかだったのだけど。

その後、私は新しく靴を買った。

薄いピンクの、あまり目立たない靴。

当時私は、靴がなくなってしまったことはショックだったけど、新しい靴を買ってもらって嬉しい気持ちがあったのも、事実だ。

その靴ももう、とっくの昔に捨てられてしまったけれど。

私は、1階へと降りた。

思った通り、陽菜がいる。

「おはよ！お姉ちゃん」

いつもと同じ。 幸せそうな笑顔の陽菜。

「・・・おはよう。 ねえ、今日は沢木君と一緒に行くの？」

不意に、私の口からそんな言葉が出た。

「うん 実はあの後、康弘と仲直りしたんだ」

私は、特に驚きはしなかった。

「・・・それでね、お姉ちゃん。

あのお礼は、やっぱりあたしだけでするよ」

陽菜は、下を向いてそう言った。

「康弘を巻き込むのは、やっぱり間違ってたと思う。だから・・・」

「

「もういいよ、陽菜」

私は陽菜を諭すような声色で言った。

「昨日は、せっかく放課後の部活が休みだったんでしょ？」

それなら、昨日あんな事になって、沢木君が機嫌損ねるのも分かる
「よ」

陽菜は黙って聞いている。

「私もあの時、断れば良かったね。
・・・それに、もう仲直りしたんなら、良いんじゃない？」

陽菜は何も言わない。

「もう終わったことなんだしさ」

私は、多少引きつった笑顔を作る。

・・・そう。もう終わったことなんだ。

「お姉ちゃん・・・」

そこで、陽菜はやっと口を開いた。

「・・・うん。そうだね」

陽菜は2、3回頷く。

「あとさ、陽菜」

私は、付け足すように言った。

「たとえば陽菜だけだったとしても、私へのお礼なんて、要らないよ？」

「え？ 何で？」

首を傾げる、陽菜。

「あの時、私が陽菜と一緒に登校したかっただけで、
大したこと・・・してないし。」

だから、お礼なんて要らないよ」

「・・・」

少しの沈黙。

そうは言っても私は、陽菜が反抗してくると思っていた。
でも・・・

「・・・そっか。分かった」

返ってきた言葉は、その一言。

「それじゃ、あたし そろそろ行くね」

」
・
・
・
」

陽菜はそう言って、家を出て行った。

私は、朝食を食べ始めた。

「・・・陽菜らしくない」

思わず、そんな言葉を呟いた。

だって、本当に陽菜らしくない。

そして私は朝食を済ませ、学校に向かった。

そこからは、またいつも通りの日常。

特に楽しいこともなければ、辛いこともない。

私は、ちらつと沢木君を見る。

「・・・・・・」

友達と、楽しそうに話をしている。

まるで、昨日の事なんてなかったみたい。

こんな日常の中でも、ひとつだけ変わったことがある。

私は、もう陽菜を憎んだりしない。

昨日だって、悪い事ばかりじゃなかった。

おかげで、本当の沢木君を知ることが出来た。

「
．．．．．
」

もうそろそろ次の授業が始まるっていうのに。

沢木君は自分の席にも着かずに、お喋りを続けている。

・・・そして。

沢木君は自分の事しか考えない、自己中心的な人なんだってことが分かった。

普段、 沢木君が陽菜にどう接しているかは分からないけれど。

昨日の振る舞いは明らかに、 陽菜のことなんて全然考えてなかった。

・・・それに、 明らかに私の事も嫌いみたいだった。

私の好きだった沢木君は、あんな人じゃない。

明るくて、優しくて。

友達思いの人だったのに……。

「
.
.
.
.
.
.
」

私は、もう沢木君なんて好きじゃない。

むしろ、嫌いだ。

それからチャイムが鳴り、いつも通り授業が始まった。

沢木君は慌てて席に戻り、私は冷静にそれを見ていた。

私は再び家に帰ってきた。

「・・・・・・・・」

家に誰もいないことは分かっているのに、もう何も言わない。

「・・・」

無言で、2階に上がっていく。

私は私の部屋の扉を開け、閉める。

そして、肩に掛けていた重い鞆をベッドの端に放り投げる。

「・・・ふー」

勢い良く机の椅子に座る。

・・・朝以来、はじめて声を出した気がする。

ふと、目にクマのぬいぐるみが映った。

そういえば、陽菜からもらった黄色いリボン、まだ付けてなかったな・・・。

でも、もう良いや。
要らない。

・・・このクマのぬいぐるみも。

「・・・」

私は、机の引き出しからカッターを取り出した。

試しに、机の角に傷をつけてみる。

「うん。良く切れる」

強く力を入れたからか、机の角には思ったより深く傷が残った。

私は黄色いリボンを、クマのぬいぐるみの胸元あたりに結んであげた。

適当でなく、丁寧に。

私は右手にカッターを持つ。

そして

ズ
ブ
ッ
・
・
・

クマのぬいぐるみの胸に、カッターを勢い良く刺した。

深く深く抉ったあと、カッターを抜く。

今度は別の場所に刺す。

目、口、手、足・・・

そして最後は、丁寧につながりあげたりボンを切り裂く。

「
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
」

切り裂いたあとのぬいぐるみから出る綿で、私の机の上はいっぱいになった。

しばらくそれを見たあと、今度はカッターを別の場所に向ける。

・・・いつからだったろうか。

今、この状態を望みはじめたのは。

きっと何年も前からだろう。

何も、こんな方法じゃなくても良かった。

楽になれば、それで良かった。

私は、窓の外を見た。

「・・・・・・」

でも、仕方がない。

生きるためのたったひとつの希望を、失ってしまったのだから。

私は視線を戻す。

カッターの先にあるものは

私の、
左手首

何分くらいそうしていただろうか。

私は震えていた。

体も、カッターを持つ右手も。

当然だ。

こんな状況になったのは、生まれて初めてだ。

「
・・・」

私はカッターを机に置いた。

そして、左手を膝にのせた。

・
・
・
怖い。

単純な事だ。

死ぬのは全然怖くない。

なのに「痛み」を感じることが怖い。

「・・・」

私はぬいぐるみの綿に塗れた机に、カッターを端によけて顔を臥せた。

「・・・やっぱり、私は臆病だな」

本当に、そう思う。

自殺をする人は、「痛み」とか「苦しみ」なんてものは気にしない。

そんな感情より、「死」という永遠を目指す気持ちの方が、高まっているから。

私は「死」を目指す気持ちより、「痛み」「苦しみ」を恐れる気持ちが高まってしまっているのだ。

「他に楽な方法ないかな・・・」

自ら命を捨てるのに、楽な方法なんてない。

それは、分かっている。

・・・でも

「・・・ああ、そういえば」

少し考えて、思い付いた。

・・・というより、思い出した。

「私、小学生の時にはあったよね。 自殺しようとしたこと」

そう。

その時も今みたいに、自殺する一歩手前だった。

「あの時は、確か・・・」

私が小学生の時、学校へ行くためには、いくつかの横断歩道を渡る必要があった。

特にその中でも私の家の近くの道路は、早朝からでも車の煩い音が絶え間なく響くような場所だった。

「・・・・・・・・」

その日、私はいつものように思い詰めて学校からの帰り道を歩いていた。

私は、ずっと下を向いていた。

だから信号の音が聞こえてくるまで、間近に横断歩道が迫っているとは気がつかなかった。

音が聞こえてきて、私は慌てて顔を上げた。

幸い、私の足は無数の車が走る道路の一步手前で止まっていた。

「
．．．．．
」

走る事をやめない、車。

次から次へと押し寄せてくる、車。

テレビドラマで見たことがある。

車にひかれてしまった人が、起き上がって、こない。

「意識が、ない・・・」

意識がないから、痛みも苦しみも感じない。

それなら、あとは楽に死を迎えるのを待つだけだ。

「・・・」

私は、真っ直ぐに道路を見つめた。

・・・もうそろそろ歩行者側の信号が青に変わって、車が走らなくなってしまう。

急がないと

「・・・」

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い・・・

痛いの、怖い。

血で真っ赤に染まるの、怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い……！

）
）
）
）
・
・
・

「……あつ」

メロディは、変わっていた。

今度は私達、歩行者が渡る番。

周りの人達はどんどん 前へ前へと進んでいく。

だけれど私は、独りその場につづくまっていた。

「・・・・・・・・」

渡れなかった。

私の、意気地なし。

結局、その日は他の歩行者達と、安全に横断歩道を渡って家に帰ってきた。

そうしてそれから、私はあの横断歩道を、安全に渡り続けた。

「・・・変わってない」

あの頃から、全然。

私は、綿だらけになったクマのぬいぐるみとカッターを、机の中に閉まっ
た。

そして私は、ベッドの中に潜り込んだ。

「……………」

一回、寝よう。

すごく、疲れた……。

コン、コン……

部屋にノック音が響く。

・・・誰？

「
歩花」

お母さんの、声だ。

私はすぐに返事をした。

「・・・何よ」

「起きてたの。夕飯の時間だよ」

部屋の時計を見ると、もう少しで7時になるところだった。

だけど。

「要らない。一人で食べててよ」

今日は食欲がない。

気分が悪い。

「もう食べたよ。せっかく作ったんだから、さっさと食べちゃってよ」

ドア越しに会話をしていても、いつも通り、冷たく響くお母さんの声。

「要らない」

私とは夕飯を食べないのに、陽菜となら食べるお母さん。

「・・・」

バンッ！！

「……っすねっ」

「でも」

私は、近くにあった学校用の鞆を扉に投げつけた。

「・・・じゃあ、知らないよ。　もう」

その言葉のあとに、パタパタとスリッパの音が遠ざかっていった。

「・・・」

頭、痛い。

私はカーテンを閉めたあと、再びベッドの中に潜り込んだ。

「・・・・・・・・」

自然と、涙が零れてくる。

何故だろう？

お母さんの態度に、いつもと変わりはないはずだ。

それなのに・・・

「何で・・・」

私は、布団を頭までかぶった。

こうしていれば、嫌でも眠れるだろう。

・・・苦しいけど、我慢しなきゃ。

私はぎゅっと目を瞑った。

なるべく、何も考えないようにした。

．．．だけれど、考えないようにすればするほど、無駄だった。

心の闇は深まり、私を地獄へと誘ってくる。

「．．．．．」

そんなことを繰り返しているうちに、いつの間にか私は意識を失った。

やがて、布団に顔を隠していても分かるくらい、光が強まる。

「・・・」

待ち望んでいたのか 待ち望んでいなかったのか 分からない。

朝、
だ。

今、何時だろう？

私は布団から顔を出し、側にあつた目覚まし時計を見る。

「・・・6時」

午前6時 ぴつたり。

「かなり寝てたなあ・・・」

昨日は学校から帰ってきて、1度寝た。

そして1度だけ目を覚まし、もう1度寝た。

だから少なくとも、私の睡眠時間は10時間以上になる。

「・・・」

こんなに寝たの、本当に久しぶりだ。

そのおかげか、昨日まで痛くて仕方がなかった頭も、すっきりしている。

私はベッドから起き上がり、カーテンを開けた。

外は、優しい光に包まれていた。

まだ早朝だからだろう。

あと2時間も経てば、もっと厳しい日差しになるはずだ。

私は、この優しい日差しが大嫌いだ。

小さい頃から

・この見守るような空は、1日の始まりを告げているように……

私を、追い詰めるみたいで。

・・・だから、大嫌いだ。

私は昨日、扉に向かって投げつけた鞆を手取る。

時間割、調べなきゃ・・・。

逆に、1日の全てが終わる夜は好きだ。

夜、眠りにつく時、私はいつも安心する。

・
・
・まるで、私の人生が終わったかのように。

今日はいつもより早く目が覚めてしまったから、早めに学校へ行く。
う。

・・・家にいたって、良い事はない。

「・・・でも」

まだ6時だ。

お母さんはまだ、家にいるだろう。

「下に降りづらいな・・・」

せっかく早く起きたのに。

偶然とはいえ、これでは、何だか勿体無い。

「・・・良いや。お母さんなんか関係ない」

私は、早く学校へ行くことを選択した。

私は、テキパキと制服に着替える。

不思議と いつものような重い気分にはならない。

熟睡したおかげでもあるが、もう一つ。

「今日は、特別な日」

私にとって。

今日は、特別な日になる予定。

私は、シャツのボタンを1つ1つ確認するようにつけていく。

今まで、ずっと出来なかったこと。

ずっと、決心がつかなかったこと。

・・・ずっと願っていたこと。

全てのボタンをつけ終えた。

「・・・」

今までの気分が、嘘のようだ。

本当に今日は、清々しい気分。

「行ってきます」

私は、私しかない部屋でそう呟いた。

そして私は鞆をいつものように右肩に掛け、早足で部屋を出て行った。

騒がしい声が聞こえる。

それもそのはず。

今は昼休みだ。

お弁当を食べていたり、友達と喋っていたり。

色々だ。

そして、私は自分の席に座り、何をするでもなく　ボーッとしてい
る。

「・・・」

早く授業、始まらないかなあ。

早く　早く・・・

そしてそれから時間が経ち、私は学校からの帰り道を歩いていく。

・・・いつもと違うのは、通る道。

「・・・もつそろそろ」

着くはずだ。 予定の場所に。

「・・・」

相変わらず、騒がしい所だ。

最後に通った時から6年は経過しているのに。

全く、変わっていない。

あの日と同じ。

着いた。

歩行者側は赤。

車だけが、ビュンビュンと音をたてて走っている。

〕
〕
〕
〕
・
・
・

メロディも、全く変わっていない。

歩道に群がる人々。
その中に、私は、
いる。

何故だろう？

物凄く、気分が良い。

そんな気分の中、私の頭は思い出していた。

・・・今まで私に、関わってきた人達。

お父さん、お母さん。

どうして私なんか生んだの？

あなたたちは私に対して、いつも厳しかった。

優しい言葉をかけてくれた事なんて、一度もなかった。

それどころか、いつも私を邪魔者扱いした。

いつも、いつも。

分かってるよ。

こうなる事を望んでいたんでしょう？

なら、安心して。

私、あなたたちの望んだ通りになるから

沢木君。

私、あなたに出会って、明るくなれたよ。

・・・また、元に戻っちゃったけれど。

それでも、ありがとう。

1年生の時から、今日までの2年間。

私に生きる希望を与えてくれてありがとう。

・・・生きる資格を与えてくれて、ありがとう。

大嫌い。

陽菜。

ありがとうね。

今まで、ずっと私の側にいてくれて。

・・・私はずっと、あなたを憎んでいたよ。

でも、分かったの。

あなたは私を、思ってくれていたんだ。

助けてくれて いたんだ。

・・・ごめんね。 今まで気がつかなくて。

私、あなたの姉で良かった。

良くも悪くも、陽菜
あなたの事、大好きだよ。

私は前を見据えた。

・・・もつ少しで、歩行者側の信号が青に変わる。

行かなくちゃ。

私は右肩に掛けられた重い鞆を強く引つ張った。

そして、煩い車の音が響き渡る道路へと歩き出して行った

キキーツ！

ドン……！

車のブレーキ音と、勢い良くぶつかった音が木霊する。

同時に、瞼が閉じられる。

開けてもらえない。

痛いのか痛くないのか分からない。

でも、微かに見える。

生々しい赤いもの。

・・・あぁ。

これでやっと、楽になれる

」

・・・」

だんだん、声は遠ざかっていく。

完全に安堵に包まれた。

ね？

私、臆病なんかじゃなかったでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4734n/>

ache

2010年10月17日19時09分発行